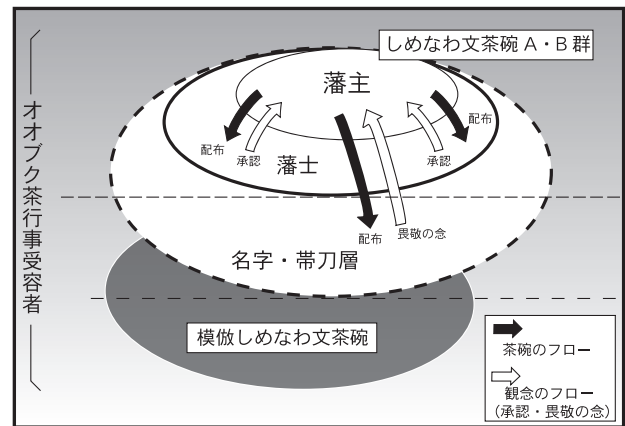


威を保ち、受容者（藩士）は繰り返し粛々と配布を受け続けることによって藩主の威信と権威を承認する。多量の茶碗が一括配布され、常に一方方向に物が流れる点をみれば、ある意味ではポトラッチとしての性格も併せもつといえる。このような理由から、しめなわ文茶碗は藩主と藩士との間で成立する異次元交換を媒介し表象する物品だったと理解されるのである。

さらにここでの配布と受容の環が、徳島城を中核として城下の広い範囲にわたりながら、同時に



第52図 しめなわ文茶碗をめぐる威信財交換モデル

藩士層および名字帯刀を許された特定の町人層に限定される、閉じた環であるという点も重要な側面である。ごく単純化するならば、しめなわ文茶碗を媒介にして、徳島城との距離感や藩政下での格差が城下に居住する人々の間で隔年ごとに再確認され続けるという図式になる。特に環の外周部分に位置する町人層に焦点をあててみた場合、茶碗それ自体が環の内外を識別する指標にもなるので、現在でいうところのステータスシンボルとしての価値を、配布の環から除外された町人層に対して帯び始める。事実関係のうえでも、徳島市内にはA群でもB群でもない、そこからの模倣品とみなされるしめなわ文茶碗が伝世品として残されている。城中からの持ち帰り品が広範な町人層にとっては文字どおりの威信財であったことを裏づける現象だといえる。このような側面からみても、城中年頭札に伴うしめなわ文茶碗の下賜ないし持ち帰りとは、まさしく威信財交換の典型例だと理解されるのである。現時点において提示する仮説を第52図に示しておく。

20世紀末の歴史考古学を主導した研究者のひとり鈴木公雄は、貨幣の基本的性格を指して「手のひらの中の国家」と呼び、貨幣がもつ国家的威信財としての機能を強調する（鈴木1999・2005）。この表現を借りつつしめなわ文茶碗の社会史的意義を一言で表すならば、それは「隔年ごとに掌中で再確認され続けた徳島藩という名の支配秩序」だったといえよう。

2. 武家屋敷出土の投網用錘鑄型が意味するもの

1) 武家層が行う網漁とはなにか

地域共同研究センター棟地点の調査においては、投網用の鉛製錘「イワ」を鑄出するための型が2点出土した（第50図239・240、図版第29）。この資料についても発見当初は性格を解明できず、いくぶん困惑気味に類例探索を始めたのであるが、意外にも身近な民俗例に解答があり、しかも漁労に付随する必需品であることを知って驚かされた。また各地の武家屋敷跡の調査事例にも類例が見いだされ、さほど珍しい出土品ではないことも判明した。常三島遺跡の場合は北方のごく近隣に別宮川（現在の吉野川）が流れるという地理的環境にある。そのため、河川付近の住民が目の前の漁場で漁労に従事するというのはごく自然発生的な現象だから、漁具が出土するのも当然だ、と理解することは可能ではある。

ただし武家屋敷から漁具が出土することの背景をいかなる側面で理解すべきかについては、ふたつの方向性がありうる。そのひとつは余暇利用の一形態ないし余技としての位置づけである。そこに居住し

た武家層の生業は、もとより漁労などとは別次元のところにある。したがって役務に従事しない在宅時に、あるいは隠居後の余技として、いわば趣味の領域の中で漁労活動にいそしんだ個人も歴代の住人の中にはいたのであろうとの推論を行うことで、この場合は事足りる。地域共同研究センター棟地点の居住者であった佐野家歴代の人物のなかには実際上の問題として、そのような人物も輩出した可能性を認めるべきであろう。たとえば江戸時代初期に生きた尾張藩の一藩士が、若い頃に好奇心から一時投網に熱中したという記事を見いだせることは、こうした方向性への傍証となる（神坂1984）。

そしてもうひとつは、より現実的な必然性を見いだす方向性である。特に常三島遺跡の場合はこちらの側面も無視しえない。本調査以後も類例は増加しており、佐野家に限定される問題では必ずしもないからである²⁾。本遺跡の屋敷地を拝領した武家層には中・下級武家が多い。こうした武家層の場合、居宅の裏庭には菜園が広がるという景観が普遍的なありようであることも指摘されており、ここで行われた畑作は補助食料の獲得手段としての必然性をもつのである。したがって漁労についても、類似した側面において把握される可能性は高いとみてよい。

文字記録を検索してみると、安永6（1777）年に藩の目付宛に示達された、別宮川（現吉野川）での網漁にかんする規制の存在が注目される（『御国御家中145』藩法研究会 1962）。それによると、まず明和1（1764）年には、河口から第十堰までの間において大網・金尻網・鵜から網漁を全面禁漁としたが、その後漸次解禁したとある。ただし安永2（1773）年には再度規制が発せられ、河口から古川の渡し（現古川・吉野川大橋付近）までの間については、先の3種の網漁に投網漁を加え、旧暦4月1日から9月30日までの期間禁ずるものとされた。安永6（1777）年の示達は、その周知徹底を指示したものである。示達の末尾には「御家中諸士末々至迄其心得可仕旨」との文言があるので、安永2（1773）年に発せられた最終的な規制はこのとき守られていなかったこともわかる。

その後も、現在確認できたところでは寛政年間に至るまで、藩士の魚釣りや網漁に対する同様の規制は散見されるのであるが、このような文字記録に残る示達の存在からみて、徳島藩の「御家中諸士末々」のなかには別宮川において各種網漁に従事する者が実在したことを確認できるし、禁漁や規制の対象となるほど、それは数多くの武士によって頻繁に行われていたこともわかる。そしてなぜこのような網漁にいそしむ武家層が多数輩出したのかについては、先に示した後者の側面、つまり藩からの知行や蔵米では賄いきれない日常生活の糧を得る手段（具体的には金銭収入の手段）として、別宮川での各種網漁も不可避免的に選択されたという解釈が可能である。特に大網などは舟と共に20名近くの人員を要する引き網であり、一網打尽に川をさらうため、予測される漁獲量は相当なものである。金尻網についてもアユ漁に用いられる漁法として知られ、予測される獲物の商品価値は高い。であるならば、漁の成果を魚商に売って現金収入の糧とした武士達も少なからずいたはずである³⁾。もちろんもっぱら自家消費に回す武士もいたのであろうが、自家消費分の確保が主目的だったとはおよそみなしえない大がかりな漁法が規制の対象となった事実こそを重視すべきであろう。

とはいえ、ここで問題とする投網漁についてみれば、4種の網漁のなかでは唯一ひとりで実施可能な漁法であり、想定される漁獲量も低いから、それは自家消費の比重が相対的に高かったことを物語るのかもしれない。その意味では、裏庭での菜園から収穫される野菜類などと同等の位置づけが可能ではないかと思われる。なお常三島遺跡出土の型から鋳出された鉛の「イワ」が、大網を除く他の2種の網漁

にも転用可能なかどうかについては未検討であり、この点の解明は今後に委ねざるをえない。しかし武家層と漁労との関係というところに問題を引きつけてみれば、余暇の活動などといった領域にとどまるものではなく、そうした領域とも当然重複したには違いないが、より現実的かつ切実な意味合いの込められた生業としての側面が濃厚である、とまではいえるのではなかろうか。

2) 体面上の綱紀肅正

ところで先の示達の内容を点検してみれば、明和1（1764）年に発せられた禁漁令の際には投網漁が規制の対象外であったことが知られ、最終段階になって初めて規制の網にかかったことがわかる。それは何を意味するのであろうか。さらにこの点に関連して興味深いのは、一旦は河口から第十堰までという広範囲を全面禁漁としたものの、それが漸次解除されるという曲折を経た後に、最終決着は河口から古川の渡しまでの間に範囲を限定する恰好になっていることであり、しかもその際には投網漁を加えたすべての網漁を一括規制していることである。規制の具体的内容は漁期を限定するというものであるが、漁獲高（特にアユとの関係は深そうである）がもっとも望める期間を禁漁とすることからみて、実質的な全面禁漁を意図したものであったことも容易にみてとれる。

その反面、対極に位置づけられるのは古川の渡しから第十堰までの範囲に対する一見不可解な措置である。この間も一旦は全面禁漁となったものの、結局は年間を通じていかなる網漁であってもすべて許容される範囲として位置づけられることになった。

全面禁漁から始まり、最終的には上流側に解禁区を設け下流側を部分禁漁とする施策の背景に一貫性を求めるとすれば、それは漁法の中身を問わず武家が網漁を行わない景観を、一定の範囲内で作出することにあつたと解釈するほかない。「河口」から「古川の渡し」までの間というのは、実は城下の北辺を東端から西端までたどった範囲を適当な目印になぞらえて表現したものだともなし、網漁に従事する武家層の姿を古川の渡しより上流に追いやることが真の目的であつたとみれば、すべてを合理的に解釈できるからである。要するに先の示達の真意は「いやしくも武士たる身分の者が城下の間近なところであらさまに網漁などをするな！ただし以前のように絶対やるなどとは言わないから、せめて城下から眼の届かないところでせよ」といったところであつたと理解される。そして投網漁が当初規制の対象外であつた理由は、まずもっとも人目を引く大網以下3種の網漁に規制をかけることで、武士が大々的に漁労にいそしむ状態を解消しようとの目的であつたとみたら納得がゆく。単独漁であれば、それは釣りと変わらない。そして最終段階になって投網漁を規制の対象に加えた理由もまた明白である。それは大網などから投網漁に切り替えることによって新たな規制に対処する途を、あらかじめ閉ざすためだったからにほかならない。たとえばかつて大網漁に熱をあげていた武士達が、新たな規制を設けた結果、今度はこぞって投網を打つような事態になった場合、規制の実効性は失われるからである。

つまるところ先の示達にみる規制の主目的は、水産資源の保全などとはもとより異質なところにあつて、それは城下町近隣の景観保全という形で表された、藩士に対する体面上の綱紀肅正であつたとみるのがおそらく正しい。意識されたのは間違いなく町人の眼であつたろうし、可能性としては魚商人や知行地領民との目に余る交わりではなかったか。

このようにみてくると、徳島藩における18世紀後半とは、藩士の体面を保つことにそれまで以上に腐心し始めた時期だという仮説が成り立ちそうである。そしてこの年代的位置をみれば、前項で論じまし

めなわ文茶碗の問題とも密接な関係が指摘できる。つまりこれらふたつの問題は、10代藩主重喜の一連の事績のなかで読み解くべき主題だといえそうである。

3) 重喜の治世とはなにかを示唆する考古資料

そこで重喜の治世(1754～1769年)とその特徴を概括的に検討してみる。さしあたって高橋啓や笠谷和比古の著書(高橋2000・笠谷1988)をもとに要約すれば次のようになる。

徳島藩の藩財政は窮乏し、藩政改革は不可欠な情勢を迎えていた18世紀の後半、そこに養子として迎え入れられ10代藩主となったのが当時17歳の重喜であり、彼はただちに藩政改革に着手する。改革の眼目は能力のある武士を引き上げる「役席役高の制」の導入であり、世襲によって職制や石高が規定される、硬直した従来型藩政の抜本的刷新であった。しかし家老をはじめとする重臣達の抵抗にあい、一旦は「役席役高の制」の導入に踏み切ることになったものの、結局は江戸幕府の介入を受けて重喜は強制的に退位させられ、藩政秩序は旧状に復するのである。笠谷によれば、重喜の目指した改革の方向は「君主専制」の確立であったとされ、それが幕藩体制とは本来的に相容れない支配形態であったために、幕府の介入を必然的に導くことになり、「押込」という廃位に結びついたのだという(笠谷1988)。

このような歴史の表舞台に登場する諸事件と、今ここで問題とするふたつの考古資料とがそのまま結びつくものではない。しかし重喜の治世のなかに、しめなわ文茶碗の登場と網漁の規制にかんする先の記事の年代を当てはめてみるとどうなるか。試みに高橋および笠谷の論考から抜き出した政治的諸事件に関連記事を挿入し、略年表的に示すと下記のようなになる。ゴシック体が関連記事である。

1754(宝暦4)年、重喜、17歳で末期養子として蜂須賀家の当主になり、藩主に就任。(この頃藩財政は窮乏し領内各地で一揆発生。藩政改革は不可避な情勢。家老格と中老格の間の権力闘争激化。)

1757(宝暦7)年、重喜、正月にしめなわ文茶碗で大福茶を服す。

1759(宝暦9)年、重喜、「役席役高の制」導入の意向表明。仕置家老山田織部は反対し重喜と対立。

1761(宝暦11)年、「七ヶ年俵約令」実施(当時の藩の負債総額は30万両)。

1762(宝暦12)年、家老山田織部、呪詛事件によって切腹(山田家断絶―後再興)。

1764(明和1)年、河口から第十堰の間の網漁を全面禁漁。

1765(明和2)年、蜂須賀家の相続問題がらみで重喜の廃位未遂事件発生。重喜、筆頭家老稲田九郎兵衛を介して首謀者格の仕置家老賀嶋上総・長谷川越前を処分断行(その後稲田九郎兵衛も排除)。

1766(明和3)年、新法「役席役高の制」実施。重喜の専制体制確立の上に、いわゆる「明和の改革」はじまる。藩士には俵約を強いる一方で別邸大谷御殿を建造。

1767(明和4)年、家臣・役人の処罰と知行召し上げが頻発。「足高」の給源確保が目的か。

1769(明和6)年、藩士の知行一律削減に着手。直後藩政の混乱を察知した幕府が収拾に介入。幕命により重喜「押込隠居」。「役席役高の制」廃止し旧法に復するが、騒動のもうひとつの柱であった相続問題については重喜の意向を汲み、幕府は嫡子千松丸治昭を11代藩主とする裁定を下す。

1773(安永2)年、河口から古川渡しまでの間、期間限定で網漁を規制。

1774(安永3)年、前藩主重喜、大谷屋敷に移る。治昭、初入国し御家中御目見を果たす。

1777(安永6)年、目付宛の示達により1773(安永2)年の規制の周知徹底がはかられる。

1790(寛政)年頃、しめなわ文茶碗の一括大量消費(藩主治昭からの配布と推定)はじまる。

このように年代的関係を整理してみると、興味深い背後関係がみえてくる。まず網漁の規制にみる変転が、いかなる政治的背景を背負うものだったのかがわかる。すなわち河口から第十堰までの間が全面禁漁になったのは、重喜の改革が本格化し始めた時期であるから、厳しい俵約令や急進的な綱紀粛正措置の一環として打ち出された可能性が指摘できることとなろう。それと対極的に、河口から古川の渡しまでの間に規制範囲を限定することで実質的な緩和策がとられるのは重喜廃位後のことである。規制の内容もみごとに対応し、それは藩政秩序が旧状に復されるなかで必然的に生じた緩和策だったとみてよい。体面と実情とのすり合せによる現実的妥協の産物だといえ、重喜の示した本来の趣旨からみると、古川の渡しより上流については全面解禁とする決着がはかられているので、実質上の骨抜き策である。ただし表向きの方針性はあくまでも規制であり、その意味において重喜の示した本旨は継承されたとみることができよう。

次に、しめなわ文茶碗の登場は重喜の藩主就任から3年後の正月であるが、在藩の正月としては2回目にあたるから、就任直後から意図された行事であったといえることができる。なお茶碗自体は京焼が選択されているものの、彼が規範としたオオブクチャ行事とは、実は将軍と幕閣層との間で取り交わされたそれであったといわれる。つまりここでは藩主と藩士の関係を、将軍と幕閣層との関係になぞらえて再現することが目論まれた可能性がある。ただし先に述べたように、重喜の在任中ではごく特定の上級武家層が対象になったとみるべきであり、配布の範囲は限定的である。時は「明和の改革」断行にいたる前夜にあたり、藩内は権力抗争の渦中でもあったから、そのような状態のなかで行われるオオブクチャという名の紐帯確認行事とは、従前の結束を切り崩すためにこそ効果を発揮する。したがって本行事の当初の姿は、重喜が現実の政治世界で演じた姿を如実に反映する側面が強かったとみなすこともできよう。

そして、しめなわ文茶碗の下賜が藩士全体に広がるのは、重喜の嫡男で相続問題の渦中に育ち、結局は幕命によって第11代藩主となった治昭（家督相続時9歳）の治世下であった。しかも藩主への就任直後ではなく、およそ20年の歳月を隔てた後のことと推定される。ここからは父重喜が演じた大立ち回りの爪痕が癒えるまでの時間の経過と、自らの権力基盤の確立を待って、その遺志を継承した息子の姿が見えるだけでなく、ここでも導入当初の姿からの大幅な改変が伴っていたことをうかがわせる。すなわち治昭によって断行された「寛政期の改革」（高橋2000）のなかで、しめなわ文茶碗は初めて藩士全体を覆う紐帯確認行事の象徴としての意味を付与されることになったと推定されるのである。

3. 考古学的成果のまとめ

以上、2項目についての考古学的成果を論じた。しめなわ文茶碗は明らかに政治的側面を反映する遺物であるし、いっぽうの漁網用の鋳型は、日常生活や生業のありようを反映する可能性を含んでいる。いわば「ハレ」の世界に属する遺物と「ケ」の世界に属する対極的な性格の遺物が共伴する関係を武家屋敷遺跡において確認できたし、両者が政治的脈絡の中で交錯するありようが把握できたとみたい。なお多くの課題を今後委ねるが、ここで論じたような考古学的成果とその後の研究の方向性を導く起点になったという意味において、地域共同研究センター棟地点の調査は重要な位置を占める。